三五七祭礼

園長
榎本トミ

わかば保育園の一大イベントである「わかばまつり」も、父母会は基より祖父母の方や地域の方々、卒園生、お知り合いの方々、等々大勢のお客様においでいただき、秋晴れのいい一日を子どもたちも大人たちも楽しいく過ごすことができました。たくさんのご協力をありがとうございました。

秋晴れの気持ちのいい日には保育園が空っぽになる程に、子どもたちは散歩に出かけていきます。一歳児クラスで「お散歩にいきましょう！」と保育士が声をかけると、急いで帽子を被り、靴を履こうとします。お散歩が大好きです！先日、らいおん組、ちびぞう組、でかぞう組の子どもたちが、さつま芋掘りに行ってきました。いつもお世話になっている地域の方の畑で大きなお芋をたくさん掘ってきました。乳児組の子どもたちにもお裾分けして、立派なお芋を一本ずつお土産に持ち帰りました。また、蔓（つる）付きのお芋や、沢山の蔓を軽トラックで運んでいただき、絵に描いたり、蔓の皮をむいて、きんぴらごぼうのように味付けして、いただいたりと保育の中で様々に活躍したさつまいもたちでした。

十一月は、七五三のお祝い月でもあります。

子どもが誕生して七年間は、模倣の時代だと位置づけている教育者（シュタイナー）がいます。子どもは、生まれるまでいた世界からたくさんの能力を持って両親の元に生まれて来ますが、その能力は、まわりにいる大人がよきお手本を見せ、適切な援助をすることで開花していくのだといいます。人間の一生の中で 生後三年間の子どもの成長発達ほどめざましいものはありません。このことは、昔からの日本の伝統行事の中にも見ることができます。「七歳までは神のうち」という言葉や、「三つ子の魂百まで」という乳幼児期の大切さを伝える言葉もあります。そして**日本の子どもの代表的な祭礼は、七五三を筆頭にその大半は乳幼児期におこなわれます。**

わかばの子どものたちも毎年七五三のお祝いをいたします。十一月のお誕生日会の日にはお祝いをし、千歳飴を持ち帰ります。まだまだ身体を作ることに全力を注いでいる子どもには、自分を守ってくれる暖かい環境が必要です。正に、人の一生に深くかかわる乳幼児期の子どもを預かる保育園の仕事は本当に責任ある仕事であると思います。子どもと保護者をはじめとするご家族との深い信頼関係があってこその共同作業のように思います。

長く「わらべうた」に関わりながら保育してきましたが、わらべうたの中にも大人がやっていると、それを真似します。そのやり取りの中で、親と子の気持ちが行ったり来たりします。だから赤ちゃんが声を出して人を求めている時は、何をさておいてもそばへ行って、あそんでほしいと思います。わらべうたあそびはみんな意味があって、つながっています。一つあそびを覚えることで身体が育ち、そしてもう一つ先のあそびへとつながっていきます。

子どもたちは、七年経つと家庭という集団からより大きな「学校」へと巣立っていきます。集団が大きくなるにしたがいさまざまな試練に直面していきます。充分愛情に包まれて育った子どもはそれを乗り越えていくだけの知恵と力をもつことができると思います。日本の子育ての知恵もわかばで活かしていきたいと思います